



俊太の前には、中学の同級生たちの集団がいた。

TREK

BIANCHI

PINARELLO

COLNAGO

GIANT

海外ブランドの色鮮やかな自転車が一団となって優雅に坂を下りている。

昨年、海外選手を招待し、函館で初めて開かれたロードバイクレース〈ツール・ド・函館〉を間近で見て、俊太を含めたクラスメイトたちは熱狂した。自転車とは思えぬそのスピードと、スリリングなレース。そしてロードバイクやユニフォームのファッショナブルなデザイン。それらがいとも自分たちの走っている田舎の道いっぱいに広がったのだ。

レースの興奮の余韻さめやらぬまま、みんな、こぞって親にロードバイクを買ってくれとねだった。そしてある者はロードバイクを、また、ある者は普段使いでも走りやすいクロスバイクを買ってもらった。

それらが今、俊太の目の前に集合している。普段は自転車禁止の函館山もツールの後、夏だけは開放されるようになっていた。

「そんなに慌てるなよ」

俊太は平静を装って小太郎に返事をし、ペダルを漕ぐ足に力を入れた。他のみんなはペダルの上に足を置いたままだ。

「お前が遅いんだって」

小太郎が不満そうに言った。

「しよがねえだろ、俊太はママチャリなんだから」

函館のホテルチェーンを経営する父を持ち、クラス委員でもある朝倉蓮が、俊太をかばうように言った。

「でもさ、俊太もロードバイク買ってもらえばいいのに」

鉄工所の息子の小太郎が言う。

小太郎の正直な言葉が俊太の胸に刺さった。

買ってもらえるものなら、とつくにそうしている。

そんな言葉を飲み込み、笑みを顔に貼りつけた。

「本格的なロードバイクはまだいいよ。体格が大人になってからでさ。どうせ買い換えることになるからもったいないし」

「まあ、そうかもね」

近くにいた杉本ゆかりが軽くうなずき、話題は違うところに移っていった。しかしみんな、うすうすは思っているのかもしれない。

俊太がいなければもっと速く走れるのに、と。

それでも俊太がこのグループと一緒に遊びに行けるのは、幼なじみの山本陽菜やまもとひなが「俊太くんも行こうよ」と誘ってくれるからである。陽菜はかわいくて人当たりもよく、クラスで一番人氣があった。小学校のころはよく一緒に登下校していたが、このころでは少し大人びてきており、昔のように気軽には近づけない気がしている。なれなれしくすると、他の男子の目も失うつた。もっとも陽菜はそんなことにはまったくかまわず、いつも俊太に優しくしてくれる。それが嬉しかった。

「R30だぞ！」

蓮の言葉が飛んだ。

「よし、競走だ！」

皆が声を揃あえて、ここぞとばかりにペダルを踏む。

目の前には、この登山道で一番急なカーブが迫っていた。

一団はいっせいにブレーキをかけ、車体を傾けながらコーナーに飛び込んでいく。羽のように軽いカーボンの車体と、ハイスピードに対応できる強力なブレーキを持つロードバイクは、あつという間に俊太の前から姿を消していった。

最後尾にいた陽菜が一瞬、心配そうな顔を俊太に向けたが、前の集団に続いた。

俊太の自転車と同じような走りをして、ブレーキが効かなくなると崖から落ちるだろう。設計のコンセプトそのものが違う。ママチャリとロードバイクはまったく別の乗り物だ。